（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　名木橋（なぎはし）　忠大（ただひろ）

本論文は、立原道造の詩作の方法を、モダニズム、新古今和歌集、現象学的建築論などとの関係から明らかにし、合わせてその文学史的な位置づけを戦時下のナショナリズムとの関わりを中心に考察した論考である。

構成は文学的方法を論じた第一部と、その詩精神について論じた第二部とからなる。

第一部では、立原が初期から言語の非連続性にこだわりを示していた事実に着目し、同時代のモダニズム的芸術観や、「フラッシュバック（断絶）」「オウヴァラップ（重層）」などの映画的手法が詩作に反映されていくプロセスが明らかにされている。さらに、立原が二項対立を止揚する「中間者」という概念にこだわり、名辞以前の主客合一の融和状態が立ち現れる「純粋状態」を詩に現出すべく、語の修飾・被修飾関係を意図的に輻輳させていく過程が明らかにされている。宮澤賢治の作品、さらには立原の模倣者の作品との共通点、相違点を検証しながらその表現の特質を明らかにしていく手法は、近・現代詩の分析方法としてきわめて示唆に富むものである。

１９３５年を境に立原詩には新古今和的手法の摂取が目立つようになるが、倒置による語句の経絡、修飾語の重層化、述部に複数の主語を受けさせる、などの手法を同歌集から学び取り、立原固有の十四行詩が生み出されて行った経緯が明らかにされている。この時期評価の落ち込んでいた「本歌取り」の手法が感情の重層化、という観点から再発見されていくプロセスは、日本古典と西洋モダニズムとの折り合う地点を具体的に明らかにした成果として注目に値するものである。

第二部では昭和十年代、つまり立原の最晩年の詩作や発言が、同時代の保田與重郎ら日本浪曼派の文学者たちと比較、検証されている。立原は同派の芳賀檀に近かったこともあり、一般に国粋主義的な傾向を強めたと見られがちだが、本歌取りを初めとするその手法には歴史を不断に創造する変容への意志が一貫しており、形骸化したナショナリズムとは一線を画している、というのが本論文の見解である。

立原の東京帝国大学工学部建築学科の卒業論文である「方法論」には現象学的発想の痕跡が顕著であり、建築と人間との関係を通し、生は壊れやすいものであるがゆえにこそ永遠・無限であるという、独自の思想を立原が学び取っていった様態が明らかにされている。こうした発想は「個」と「共同体」との関係を運動概念として捉える方向へと進展するが、一方で国体が絶対化されるその後の歴史を前に、あやうい均衡を孕むものでもあったという。終章では生前の立原の可能性をその後の加藤周一の文学的足跡に重ね合わせ、立原の持っていた発想を戦後、社会の連帯に転換していく加藤の言動を通して、立原の文学史的意義が見据えられている。

一部、影響関係の論証にさらに慎重な手続きが求められる箇所も見受けられるが、立原詩の持つ重層的なイメージを詩作の方法として具体的に明らかにし、さまざまな先行テクストとの関係をもとにその時代的な意義を解明した功績は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。